

# 九鬼周造の情緒論の哲学的特質

—デカルト『情念論』との比較を通して—

**The Philosophical Characteristics of Shūzō Kuki's Emotion Theory  
—Through Comparison with René Descartes's *Les passions de l'âme*—**

石 瑩

SHI YING

(日本女子大学大学院人間社会研究科 相関文化論専攻博士課程後期)

## 要 約

本稿は、九鬼周造の情緒論について、デカルトの『情念論』との比較を通して、その哲学的特質を明らかにしようとするものである。

まず、感情の意味について両者の論考を比較する。デカルトは情念を精神の機能としての知覚・感覚・情動という面と、身体機能としての発生・維持・強化という面との両方から追究した。それに対して、九鬼は情緒を心身合一体の「全人」的観点から捉え、それを偶然・必然・可能といった事物の存在様相との関係性において追究した。

次に、感情の分類について両者の論考を比較する。デカルトは情念を善悪という倫理性、時間の概念性などから基本情念と特殊情念に分類した。それに対して、九鬼は情緒を人間と世界・他者との関係性、時間の概念性、気分の方向性などから分類した。

最後に、感情にいかに対応するかについて両者の論考を比較する。デカルトは情念の本性を善いものと信じ、情念の悪用とその過剰を避けるべきことを説いた。それに対して、九鬼は情緒を諦観による「不苦不楽受」という無記情緒として受け止めるべきことを説いた。

以上のような比較を通して、九鬼の情緒論の意義を明らかにする。

## [Abstract]

---

This essay aims to elucidate the philosophical characteristics of Shūzō Kuki's emotion theory through comparison with René Descartes's *Les passions de l'âme*.

Firstly, this study will compare the meaning of emotion in the work of both philosophers. Descartes examined the emotion of pathos, holding that it included the mental functions perception, sentiment and emotion and the physical functions generation, preservation and reinforcement. In contrast, Kuki examined emotion in relation to aspects of existence which unified mind and body from the viewpoint of the 'whole man', including contingency, necessity and possibility.

Secondly, this discussion will compare Kuki and Descartes's philosophical classification of emotion. Descartes separated pathos into basic passion and special passion depending on its good or bad ethical position and the conceptuality of time. In contrast, Kuki classified emotion by the relationship between humans and the surrounding world, other people, the concept of time or the direction of mood.

Thirdly, this study will compare Kuki and Descartes's respective philosophical methods of dealing with emotion.

Descartes believed that the real nature of pathos was good and advocated that the abuse of pathos or the excess of pathos should be avoided. In contrast, Kuki advocated that emotion should be dealt with by suffering without bitterness in a state of ease or resignation.

Thus, through examining the ways in which Kuki and Descartes treat emotion, the philosophical meaning of Kuki's emotion theory will be elucidated.

---

## I. はじめに

九鬼周造は、ヨーロッパに留学して西洋哲学を本格的に摂取し始めた頃から、「いき」論の執筆を経て、文芸論や偶然論を完成させた時期に至るまで、一貫して情緒というものに深い関心を示してきた。

近年九鬼研究は盛んになっているが、彼の情緒論に関しては、その重要性にもかかわらずいまだ十分な説明がなされていない。九鬼哲学では、人間と実存に関連する問題に一番重要な位置が与えられ、偶然論、情緒論、時間論においても「人間存在」がその視点の核心とされている。特に論文「人間学とは何か」には、そうした特徴が顕著に表れている。

九鬼の情緒論は、本居宣長の「もののあはれ」論、仏教の「諦め」の思想や「無記」論、デカルト、スピノザ、マクドゥーガルなどの感情論、シェーラーの情緒論、ハイデガーの「気分」の哲学など多様な思想を基盤としている。それらの中でも、特にデカルトの『情念論』からは大きな影響を受けている。感情の意味に対する理解、「驚き」の情を重視する考え方、感情を分類する方法など、多様な面で九鬼はデカルトの『情念論』の考え方を受け継ぎ、それを自己の立場から展開している。

デカルトは人間の身体と精神との両方に注目し、感情を外部の対象の刺激による身体を通しての精神の「受動 (pathos)」と考え、そのメカニズムを追究した。そこでは、感情に一定の「効用」を認めながらも、最終的には精神による感情の統御としての「高邁さ (générosité)」が求められることになる。こうした考え方は、西洋の伝統的感情論の流れを受け継ぐものである。西洋では、魂のうちの理性的部分と非理性的部分とを区別するプラトンやアリストテレスにせよ、非理性的部分の自立性を認めないストア派にしろ、理性による感情のコントロールを目指す考え方が主流をなしている。

それに対して、九鬼の情緒論においては、精神と身体とを二元的にとらえる考え方はなく、感情とは心身合一として人間が、偶然・必然・可能といった「物の存在の仕方」に対して取る「有機的な反応」とされている。そこから、感情を通しての世界や他者、さらには時間性との深い関わりが問題にされる。

感情の分類に関しては、デカルトは「驚き (admiration)」を基本に、「愛」、「憎しみ」、「欲望」、「喜び」、「悲しみ」という六つの基本的感情を説く。九鬼はそれを受け継ぎながらも、さらに「恐」、「怒」、「恋」、「寂」という四つの実存的な感情を加えている。そこから両者とも多様な感情を体系化している。

それらの中で、デカルトも九鬼も、「驚き」を最も根本的な感情としている。ただし、デカルトにおいては、「驚き」は何らかの対象との初めての出会いによって引き起こされるものであり、

人間にとって最も素朴で原初的な感情であるのに対して、九鬼においては、「驚き」は偶然性のもつ三様態に対応するものとされ、その形而上的性格が強調され、知性の備える人間でしか感じられない「不苦不楽受」という「無記」的情緒であるとされている。

また、感情への適応の仕方について見てみると、デカルトは情念を本質的には善いものと考えますが、その悪用と過剰は避けるべきだとし、情念に対して最も敏感な人間であっても、知恵を以て自分の情念を要領よく支配すべきことを説く。それに対して、九鬼は、物事の認識において、あるいは社会实践による歴史の創造において、情緒が積極的な役割を果たしていることを強調している。ただし、そうした九鬼も、最終的には情緒そのものを「諦観」のなかで調和させ、「不苦不楽受」の「無記」的情緒として受け止めるべきだとしている。

以上のように、本論はデカルトとの比較を通して、九鬼の情緒論の哲学的特質を明らかにすると同時に、人間にとって感情とはどのような意義を持っているのかという根本的な問題にもアプローチすることを目ざしている。

## II. 感情の定義から見る両者の相違について

まず、感情の定義における両者の相違を見てみたい。九鬼は『西洋近世哲学史稿』上巻<sup>1)</sup>において、デカルトの人間学についての詳しい論述を残している。その内容は、人間の精神と身体との関係性と、心理説による六つの意識作用と、情念論に関するものである。

九鬼によれば、デカルトは人間を身体と精神との相互作用によって両者が結合したものと考え、神によって創造された人間の精神は、脳髄の中心にある「松果腺」という所に置かれた。精神は、その「松果腺」を動かして、全身に分布した神経のうちに流れる微かな空気である「動物精気」の運動する方向を決める。ただし、「動物精気」の運動には、精神ばかりでなく、「情念 (pathemata)」も深く関わっている。

デカルトの心理説においては、「意識 (cogitatio)」は「能動 (actio)」的作用と「受動 (passio)」的作用との両面をもっている。「能動」的作用は精神自体から生じ、しかも常に精神の支配下にあるのに対して、「受動」的作用は精神に深く関わるが、精神の外からの働きかけによって生じるものであり、精神自身の力で統制し切れないものである。「情念」は、まさにこうした精神の「受動」的作用に属している。デカルトは「情念」を次のように定義している。

「特に精神自身に關係し、そして動物精氣の何等かの運動によつて呼び起され、維持され、強められるところの知覺 (perceptions) 又は感情 (感じ sentiments) 又は感動 (情緒 émotion) である。」 (Passions, I.27.)<sup>2)</sup>

この訳は、九鬼自身によるものであるが、ここで注意したいのは、「émotion」という言葉を、「感動」「情緒」と訳している点である。『情念論』の九鬼以外による翻訳を見ると、『デカルト著作集』

1) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店, 124-129 頁

2) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店, 129 頁

版<sup>3)</sup>にせよ、岩波文庫版<sup>4)</sup>にせよ、上の「perceptions」・「sentiments」・「émotion」の三つの概念は、それぞれ「知覚」・「感覚」・「情動」と訳されている。デカルトによれば、「émotion」という概念は、知覚や感覚ではなく、精神を最も強烈に動かす感情を意味している。そこで通常は「情動」と訳されているのである。しかし、九鬼は「émotion」という言葉を「情動」ではなく、「情緒」と訳したのである。しかも、自分の感情論も「情緒論」と名付けている。このことから考えると、九鬼は「情緒」という言葉を、「知覚」や「感覚」ではなく、人間の精神を最も強烈に動かす情動の意味で使っていると思われる。つまり、デカルトの『情念論』においては、「émotion」の意味は「知覚」・「感覚」・「情動」という三つの概念を含み込んだものとして理解されているのに対して、九鬼の情緒論においては、「情緒」という言葉は、三つの概念でいえば、特に「情動」を指していると考えられる。

なお、デカルトと九鬼では、感情の根本にある心身関係のとらえ方が異なっている。九鬼は、人間の意味を詳しく考察した論文「人間学とは何か」において、次のように述べている。

デカルトも、情緒は、人間が物體と心との結合であることの認識根拠であるとして、特に人間的なものと考えた。……情緒とは肉體と心との合一としての人間が、物の存在の仕方に対する有機的な反応であると考へられる。<sup>5)</sup>

論文「人間学とは何か」は、1938年に出された『人間学講座』の一冊に寄稿したものであるが、この頃日本ではマックス・シューラーに発する哲学的人間学への関心が高まっていた。そうした背景のなかで九鬼も自分なりの人間学を打ち出そうとしたのである。

ここで九鬼は、自分とデカルトとが同じ立場に立っているかのように語っている。論文「人間学とは何か」では、「肉體と心との合一としての人間」を「自然的人間」と定義し、そうした人間の側面への注目は、デカルトも含めて多くの西洋哲学者に共通して見られるとしている。しかし、もう一步踏み込んで考えてみると、「肉體と心との合一」といってもデカルトと九鬼とではその内容がかなり異なっている。

デカルトは心身二元論の立場に立ち、身体と精神とは異質なものとしたため、相互作用による結合は可能であっても、両者の有機的な統一は考えられていない。事実、九鬼は『西洋近世哲学史稿』上巻では、デカルトにおいては精神と身体との結合が基本的には未解決のまま残されたとしている。

要するに Descartes は形而上學で立てた二元論を人間學では精神と身體の關係に關する限り、幾分否定するやうな傾向を取つたのである…ともかくも Descartes の二元論と精神身體の結合とをどういふやうに調和するかといふことは非常に解決の困難な問題であつて、また Descartes 以後の歐洲大陸の哲學は當分この問題を中心として展開したのである。<sup>6)</sup>

3) 花田圭介訳 (1993) 『デカルト著作集 3』白水社、179 頁

4) デカルト (谷川多佳子訳) (2008) 『情念論』岩波書店、27 頁

5) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店、25 頁

6) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店、126-127 頁

九鬼は、デカルトのような考え方より、プラトン、アリストテレス、アウグスティヌス、パスカル、メヌ・ド・ビランなどに見られる心身合一の見方、特に彼らが人間を三つの相の総合（＝「全人」）とした見方に関心を示している。

この三つはメヌ・ド・ビランが人間を動物的生活、人間的生活、精神的生活の三方向から考察したのにはほぼ該当する。従つてパスカルの身體 (corps)、精神 (esprit)、愛 (charité) の三秩序にも當り、またアウグスティヌスが人間の心を肉體に於て (in corpore)、それ自身に於て (in seipsa)、神の許に (apud Deum) の三様態に分けたのにも當るわけである。この三区分は本質上は既にプラトンやアリストテレスにも見られたのである。<sup>7)</sup>

さて、次にデカルトは、情念を精神の働きと緊密に関わる「知覚」・「感覚」・「情動」という機能ばかりでなく、身体の働きとしての「動物精気」の何らかの運動による発生・維持・強化という機能との両方から考える<sup>8)</sup>。つまり、デカルトは情念を人間における精神の機能と身体の機能との両方のメカニズムから考えているのであり、その意味では、精神ばかりでなく身体の機能にも注目しているといえる。

しかし、他方でデカルトは、情念を「意志」と区別しなくてはならないと考える。精神の純粋な「能動」としての「意志」は、直接に精神の中からきて、精神にしか依存していないものである。それは情念の原因として説明される場合もあるが、デカルトは情念とは別の概念であると考ええる。このように、身体の影響をまったく受けない精神の純粋な働きというものもデカルトは一方で考えているのである。

それに対して、九鬼は、あくまでも精神と肉体との統合としての人間を考え、それが情緒の主體となると考える。しかも、そうした情緒を物事の存在様相との関係性においてとらえようとする。

九鬼において、物事の存在様相は「偶然的存在」、「必然的存在」、「可能的存在」に分類されている。「偶然的存在」はあることも無いこともできる虚無性を帯びる存在であり、「必然的存在」は存在自身において同一性が保持される存在であり、「可能的存在」は虚無的な「偶然的存在」を實在の領域にある「必然的存在」に媒介する存在であるという。これら三つの存在様相は、それぞれ孤立的に存在するのではなく、「偶然的存在」の中に潜在している極小の「可能的存在」が実践を媒介として反復された後に「必然的存在」となるように、「偶然的存在」から「可能的存在」へ、「可能的存在」から「必然的存在」へという形で転化していく。<sup>9)</sup>

この三つの存在様相に応じて、九鬼は三種の情緒を考える。「偶然的存在」に対しては「驚き」という情緒が、「必然的存在」に対しては「快不快」の情緒が、「可能的存在」に対しては「不安」の情緒がそれぞれ対応する。

人間は、同一性が保持される「必然的存在」に対しては「快不快」の情が起り、非現実的存在でありながら「必然的存在」に発展する素質を持つ「可能的存在」に対しては「不安」の情が

7) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店, 18 頁

8) デカルト (花田圭介訳) (1993) 『デカルト著作集 3』白水社, 179 頁

9) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店, 25-30 頁

起こり、存在自身の同一性から離れ、あることもないこともありうる「偶然的存在」に対しては「驚き」の情が起こるといふのだ。

なお、先に述べたように、九鬼は論文「人間学とは何か」のなかで、情緒は「自然的人間」に基づいたものとしている。九鬼によれば、人間とは「自然的人間」、「歴史的人間」、「形而上的人間」という三つの側面から成る「全人」である。そのうちで情緒とは、「自然的人間」という側面に根ざしたものだといふのである。そして、「自然的人間」の人間像について、「エピクロスの大伴旅人的享楽主義者」と、「ベーコン的平賀源内の實証主義者」と、「西行的ノヴァーリス的浪漫主義者」という形で六人の人物を挙げて説明している。

九鬼によれば、感情を抑えるべきだというストア派の「克己説」に対して、エピクロスは感情に持たされた幸せな喜びを認めるべきだといふ「快樂説」<sup>10)</sup>を説いた。人間の自己保存と種族保存との必要性によって起こる栄養衝動と生殖衝動とが人間の本質であるといふ考え方がその根底にあるとする。ベーコンはイギリスの「経験論」<sup>11)</sup>に属し、知識を得るためには、精神は経験に直面して、その内容を知覚によって吸収すべきだと主張した。ノヴァーリスは「浪漫主義」<sup>12)</sup>に属し、理性や知性より感情や想像を重視し、個性と主観性を強調し、宗教的で神秘的な傾向をもち、自然も精神によって理解され、更新せられると考えた。

一方、大伴旅人に関しては、その歌風は風雅心に溢れ、老荘の自由思想によく似ているとされている。彼の「今の代にし楽しくあらば來む生には蟲に鳥にも吾はなりなむ」といふ歌が伝える人間観<sup>13)</sup>に九鬼は共感している。平賀源内に関しては、蘭学を通してルネサンスの影響を受けた「発明家としての技術人」<sup>14)</sup>として九鬼はとらえている。源内は、宇宙の「地水火風」を以て人間の身体の構成を考える人間宇宙論を説く。西行について九鬼は特に論じていないが、大西克礼によれば、日本の「浪漫主義」の特徴は、「宗教的自然感情」の要素と切り離すことのできない所にあり、西行はそうした日本式の「浪漫的な自然感情」の代表者であるといふ<sup>15)</sup>。

これら六人の思想を見てみると、九鬼がどのように「自然的人間」を理解しているかが分かる。その人間像は、エピクロスの「快樂説」と大伴旅人の自由な風雅心とを融合させた享楽主義者であり、ベーコンの「経験論」と平賀源内の人間宇宙論とを並行させた実証主義者であり、ノヴァーリスのドイツ観念論の浪漫主義と西行の日本的浪漫主義とを調和させた浪漫主義者である。これら三者はそれぞれ異なった立場であるともいえるが、九鬼は「自然的人間」とは、これら享楽・実証・浪漫が統一されたものだといふ。そして、そこから様々な情緒がおのずから湧いてくると見ている。「歴史的人間」や「形而上的人間」にも自然感情は起こるが、その発生の原因は「自然的人間」の特性に根ざしている。こうして九鬼は、「自然的人間」に基づいた「浪漫的な事実」<sup>16)</sup>としての情緒を追究するのである。

10) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店, 132 頁

11) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店, 206-215 頁

12) 九鬼周造 (1981d) 『九鬼周造全集 7』岩波書店, 261-263 頁

13) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店, 10 頁

14) 同書, 24 頁

15) 大西克礼 (2013) 『自然感情の美学 大西克礼美学コレクション2』書肆心水, 306-307 頁

16) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店, 25 頁

### Ⅲ. 感情の分類から見る両者の相違について

次に、感情の分類における両者の相違を見てみたい。

九鬼は『西洋近世哲学史稿』上<sup>17)</sup>において、デカルトによる情念の分類について論じている。それによれば、デカルトは情念を「原始情念」と「特殊情念」とに分別している。「原始情念」は「驚異 (admiration)」、「愛 (amour)」、「憎 (haine)」、「欲望 (désir)」、「喜び (joie)」、「悲しみ (tristesse)」という六つのものに分類され、「特殊情念」は「原始情念」から導出されるものである。

「原始情念」において、「驚異」は「最も根本的な第一の情念」であり、それは対象の性質に関係なく、積極的でも消極的でもない「中性的な感情」と見なされる。また、ある主体にとって、対象が良いものであれば、それを「愛」し、対象が悪いものであれば、それを「憎」む。さらに、未来において、良いものを獲得しようとし、あるいは悪いものを避けようとする「欲望」があり、現在において、良いものを獲得した「喜び」と、悪いものを獲得してしまった「悲しみ」とがある。九鬼はその分類の方法に触れていないが、論文「人間学とは何か」における下記のような表現を見ると、「驚き」の情を根源的な情緒とする見方はデカルトからの影響によると考えられる。

デカルトが驚きを最も根本的な第一の情緒と見たことは人間學的洞察に基づいてゐる。生物発生的には驚きと恐れとを區別し得ないかも知れないが、人間學の立場に立つ限りは、驚きは最も原始的な情緒であるといふことができる…人間として偶然の存在を認める以上は、驚きは情緒の中で最も顕著な形態を備へたものであることをも認めなければならない。<sup>18)</sup>

そして、デカルトはこの六つの「原始情念」から、さらにいくつかの「特殊情念」が生まれるとしている。対象の大小によって、「驚異」は「重視」・「軽視」となり、そこからさらに「高邁」・「高慢」・「謙虚」・「卑下」という四つの情念が形成される。また、自分以外の対象に対して、善のあるものに「尊敬」の情念が起こり、悪のあるものに「軽蔑」の情念が起こる。ここに現れた善悪の概念は、人間の内面から湧いてきた直感や理性的認識を通して、自分の本性に適合するかどうかによって決められるという<sup>19)</sup>。そして、未来において、「欲望」が達成できると予期すると、「希望」・「危惧」の情念が起こり、さらに「希望」が極大になると、「安心」・「確信」の情念が起こる。それに対して、「危惧」が極大になると、「絶望」の情念が起こる。「執着」というのも一種の「危惧」と見なされる。「希望」を実現させることが選択の困難に直面する場合に、「不決断」と「勇氣」・「大胆」の情念が起こる。また、それにしたがって、「競争心」の情念も引き起こされ、その反対となる「臆病」・「恐怖」の情念も起こる。しかも、「不決断」を感じている間に、現在や過去に対する良心の「不安」という情念が起こる。悪のあるものによって生じた「喜び」は「笑い」・「嘲り」の情念を伴い、他人のもつ善悪がそれ自身に相応しいかどうかと判断する場合は、「悲しみ」から生まれた「羨み」・「憐れみ」の情念が起こる。さらに、その善悪をもつに至っ

17) 九鬼周造 (1981c) 『九鬼周造全集 6』岩波書店、129-130 頁

18) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店、25-26 頁

19) デカルト (花田圭介訳) (1993) . 『デカルト著作集3』白水社、207 頁

た原因を考えた場合、自分が作った善に対しては「自己満足」の情念が起こり、自分が作った悪に対しては「後悔」の情念が起こる。また、他人が作った善に対しては「好意」の情念が起こり、その善が自分に与えられた場合は、その人に対して「感謝」の情念が起こる。それに反して、他人が作った悪に対しては「憤り」の情念が起こり、その悪が自分に与えられた場合は、その人に対して「怒り」の情念が引き起こされる。そして、自分の中に存在する善が他人に関わる時は「誇り」の情念が起こり、自分の中に存在する悪が他人に関わる時は「恥」の情念が起こる。最後に、現在において善が続けば、「倦怠」・「嫌気」の情念が起こり、悪が続けば、「悲しみ」が減少する場合もある。過去にあった善に対しては、「悲しみ」に属する「心残り」の情念が起こり、過去にあった悪に対しては、「喜び」に属する「嬉しさ」の情念が起こる。

以上のように、デカルトは「驚異」を情念の根源として、それを含む六つの「原始情念」と、「原始情念」によって導出され結合された「特殊情念」とに分類する。その際、分類する方法は、主として、対象の属性が人間の本性に適合するかどうかということに基づく善悪観と時間の観念による。

それに対して、九鬼の分類方法は多様であり、情緒が人間と世界（存在様相）・他者（対象）との関係性、時間の概念性、気分の方向性などによって分類される。

まず、情緒の定義から見ると、先に述べたように、物事の存在様相に基づき、「必然的存在」に対する「快不快」の情と、「可能的存在」に対する「不安」の情と、「偶然的存在」に対する「驚き」の情とに分類される。

このうち、「必然的存在」に対する「快不快」の情においては、純主観的な情緒と客観的な情緒とがある。前者は人間の心の底で感じられるものであり、「嬉しさ」・「悲しみ」・「喜び」・「歎き」・「楽しみ」・「苦しみ」といったさまざまな情緒がある。後者は対象への志向性に基づくものであり、「愛」・「憎」がその基本的な情緒である。

「愛」・「憎」は、時間性と対象の性質とによってさらに分類されている。時間的見地から見れば、現在の地平においては、「愛」の対象に対して「親しさ」・「飽足らなさ」・「惜しさ」・「果無さ」の四つの情緒があり、「憎」の対象に対して「厭」・「飽」・「煩わしさ」の三つの情緒がある。過去の地平においては、「愛」の対象に対する「懐かしさ」があり、「憎」の対象に対する「悔」がある。未来の見地において、「愛」の対象の欠如に基づいた「恋しさ」・「寂しさ」の情緒があり、「憎」の対象に対する「恐」の情緒がある。

また、対象の存在性格に規定された「愛」・「憎」においては、「愛」の対象の存在性格が自分より小さい場合は、「労り」の情緒が起こり、その存在性格が自分より大きい場合は、「畏れ」・「甘え」の情緒が起こる。「憎」の対象の存在性格が自分より小さい場合は、「蔑み」の情緒が起こり、その存在性格が自分より大きい場合は、「諦め」の情緒が起こる。しかも、「愛」・「憎」の対象が巨大な存在性格を持つ場合は、「畏れ」と「諦め」とに融合された「婦依忍従」という混合情緒も生まれる。対象の特殊作用に規定された「愛」・「憎」において、「愛」すべきものが与えられた場合は、「恩」の情が起こり、「憎」むべきものが与えられた場合は、「怒」・「怨」・「憤」という三つの情緒がある。対象の所有物の性格に規定された「愛」・「憎」において、それが自分に属する場合は、「愛」すべき所有物に対しては「誇り」・「高慢」の情緒が起こり、「憎」むべき所有物に対しては「恥」・「卑屈」の情緒が起こる。他方、他者が「愛」すべき所有物を持っている場合

は、「羨」・「妬」の情緒が起こり、「憎」んでいる他者が「憎」むべき所有物を持っている場合は、「いい気味」の情緒が起こり、「愛」する他者が「憎」むべき所有物を持っている場合は、「憐み」の情緒が起こる。

他に、日本文化に由来する特殊な情緒も提示されている。「勞り」の裏面には、人間の主観性に深く関わる「優しさ」の情緒があり、「寂しさ」と「悲しみ」とに融合された「侘しさ」の情緒があり、万物の有限性に対する「憐み」の情緒と人間自身の有限性を自覚した「悲しみ」の末梢形態としての「哀れ」の情緒とに制約された「もののあはれ」の情緒もある。

次に、「可能的存在」に対応する「不安」の情においては、未来的時間性をめぐって、「欲」に伴う「満足」・「不満」・「疑」・「惑」・「希望」・「絶望」・「心配」・「安心」・「確か」・「頼もしさ」・「覚束無さ」といった情緒群が形成されている。「欲」が達せられるかどうかということによって、「満足」・「不満」が起こる。未来の地平において、対象が動揺しない絶対的根拠を客観の環境に依存する時には、「疑」の情が起こる。それに対して、対象が動揺しない絶対的根拠を主観の意志に依存する時には、「惑」の情が起こる。そして、未来の地平において、「愛」する対象に到達する可能性がある場合に「希望」が起こり、「憎」む対象に到達する可能性がある場合と「愛」する対象に到達できない可能性がある時に「心配」の情が起こる。しかも、「希望」と「心配」は相互に対立することではなく、「希望」の中に「心配」が混じり、「心配」の中に「希望」も生じている。さらに、「希望」の蓋然性が極限に大きくなる場合に、「頼もしさ」の情が起こり、「希望」の蓋然性が確実性に到達して希望通りの結果が訪れる時に、「確か」の情が起こる。それに反して、「希望」の蓋然性が極限まで小さくなる場合に「覚束無さ」の情が起こり、「希望」の蓋然性がだんだんゼロまで減少した時は、「絶望」が起こる。「希望」に反対する結果が突然に現れた時には、「失望」の情が起こり、「心配」に反対する結果が突然に訪れた時には、「安心」の情が起こる。

最後に、「偶然的存在」に対応する「驚き」の情緒についてであるが、これは「偶然的存在」の様相性によって分類されている。それは、「何か有ることも無いこともできるやうなもの」という「定言的偶然」に対する「驚き」と、「何かと何かとが遇ふこと」という「仮說的偶然」に対する「驚き」と、「何か稀にしかないこと」という「離接的偶然」に対する「驚き」である。

特に、「何か稀にしかないこと」に対する「驚き」において、「珍しさ」・「可笑しさ」・「嚴か」・「美しさ」・「怪しみ」という一群の情緒が展開されている。「珍しさ」は「偶然的存在」の稀の性質によって発展された一種の独立な情緒であり、「可笑しさ」は小さいことが突然に現れる状況に対して起こる一種の「驚き」である。人間の目的理念と矛盾しているところで、「可笑しさ」は笑いを誘うという。その矛盾を把握することが高等な知性の働きと緊密に関わるため、「可笑しさ」は顕著に知的情緒とされる。それに反して、「嚴か」は大きいことに対して起こる一種の「驚き」とされている。カントが語っているように、「嚴か」には果てしない星空に対する驚嘆と、内面の道徳的な要素とが溢れている。そして、「美しさ」は「雑多な統一」に対する一種の「驚き」によって起こる芸術的情緒とされ、「怪しみ」は「驚く」べき対象に対して、その存在の理由が欠ける時に起こる情緒とされ、さらにそこには、対象の存在の理由を追究しようとするところがあり、そのため「怪しみ」は宗教の成立に不可欠なものとなる。つまり、「何か稀にしかないこと」に対する「驚き」の情は、「可笑しさ」において知的情操へ、「嚴か」において道徳的情操へ、「美しさ」において美的情操へ、「怪しみ」において宗教的情操へと発展していると考えられる。

また九鬼は、三つの存在様相に伴う情緒を、興奮・沈静の方向を取るものと、緊張・弛緩の方向を取るものと、快・不快の方向を取るものという視点からも分類している<sup>20)</sup>。九鬼によれば、「偶然的存在」は同一性の圏外にある異常なものであるため、それに対する情緒は沈静から興奮への方向を取っている。「可能的存在」は実現するかどうかという不確かな存在であるため、それに対する情緒は弛緩から緊張への方向を取っている。「必然的存在」は現実において、自身に同一性が備わっていると確定したものであるため、それに対する情緒は存在自身の性質によって不快から快への方向を取っている。

これら、三つの存在様相は相互に関わっているため、一つの存在様相に対する情緒の方向に、他の存在様相に対する情緒の方向が混入されることもありうるという。例えば、興奮への方向は「驚き」の情における核心的な気分属性であるにも拘わらず、快不快の情としての「怒」「恐」と、不安の情としての「失望」のなかにも、強い興奮の要素が混入されている場合がある。

以上のように、九鬼は三つの存在様相によって情緒を三種類に大別し、その三種類の情緒を人間と世界・他者との関係性、時間の概念性によってさらに詳しく分類した上で、それらの情緒が相互に混入し合う姿も分析している。

先に述べたように、九鬼が「驚き」の情を根源的な情緒としたのはデカルトの影響であった。また、時間の概念性によって感情を分類するのもデカルトの影響といえよう。しかし、分類方法の本質においては、デカルトは人間の本性を重視するため、その分類においても精神と身体との二元性に基づく人間そのものの真理を追究している姿勢が顕著であった。それに対して、九鬼は日本文化に根ざしている人間と世界・他者との「二元邂逅」の倫理性も重視するため、その分類は人間そのものの本質という視点以外に、内面の情緒と外部の世界・他者との連動性と、それによる情緒の内面的変動性に基づいている。そこには、感情の分類方法における両者の相違が著しく見られる。

#### IV. 感情への適応から見る両者の相違について

最後に、感情への適応における両者の相違を見てみたい。前の二章ですでに述べたように、デカルトは情念を人間そのものの真理において追究している。そのために、各情念は精神における本質と、身体における脳・内臓・血液や表情・顔色などの変化との面から分析される。それに基づいて、最終的には精神による身体の統御としての「高邁」の徳を実行することを通して、情念の混乱が治療される<sup>21)</sup>。『情念論』によれば、徳の真実は精神のうちに存在するある種の思考の習慣であり、「精神の受動的情念」として認識されている<sup>22)</sup>。具体的に言うと、「高邁」の徳とは、人間自身の自由意志を尊重し、その自由意志の「善用」と「悪用」によって生まれる讚美と非難とを事実として客観的に考え、「善き意志」を実行するということに基づいている。それによって、「高邁」な人々は自分の情念を支配し、自身の利害より他人に親切にして善を与える。大きい期待から来る「欲望」・「執着」にも乱されないし、自分の徳を信じる上で他人への依存が薄くて、「憎

20) 九鬼周造 (1981a) 『九鬼周造全集 3』岩波書店, 152 頁

21) デカルト (花田圭介訳) (1993) 『デカルト著作集3』白水社, 243 頁

22) デカルト (花田圭介訳) (1993) 『デカルト著作集3』白水社, 252-253 頁

しみ」・「恐怖」・「怒り」にも乱されない<sup>23)</sup>。

デカルトは、情念の本性は良いものと考え、ただし、情念の悪用と過剰を避けることが重要である。人生の善悪も情念に依存し、最も情念に敏感な人こそ、人生を深く味わうことができる。自分から情念を要領よく処理する技を学び、情念によって起こされた悪を忍耐しやすいものに転化させることによって、すべての情念から喜びが引き出せる<sup>24)</sup>。つまり、デカルトは人間の精神そのものの本質を認識することに基づいて、感情に適応する方法を考えたのである。

それに対して、九鬼はデカルトのように、最初から精神による感情の抑制をめざすのではなく、まずは現実に生きる人間の実存の姿を情緒という視点から明らかにしようとした。

九鬼は、デカルトの六つの基本情念から影響を受けたが、さらに四つの情緒を加え、人間の実存にとって十種類の情緒を主要なものとしている<sup>25)</sup>。九鬼の哲学において、人間と実存に関連する諸問題は哲学の最も重要な問題とされている。「全人」に根ざしている情緒の問題にあっても、人間存在が視点の中核となっている。そのために、「驚」・「欲」・「嬉」・「悲」・「愛」・「憎」の六つの情緒のほかに、「恐」・「怒」・「恋」・「寂」の四つの情緒も加えられた。九鬼によれば、「驚」・「欲」の情緒は人間生存や存在そのものに関連し、「恐」・「怒」の情緒は人間の自己保存に関わるものであるという。そして、「恋」とその裏面にある「寂」の情緒は人間の種族保存に関する情緒であり、「恋」の根源は人間の相互填補的生殖衝動にあるとされている。主観的情緒としての「嬉」・「悲」と、客観的情緒としての「愛」・「憎」とは、人間の生存が充実しているかどうかということの標準となっている。具体的に言えば、「恋」の情緒は、「愛」する対象の現在の欠如に基づき、未来の可能性を求める緊張性に溢れている。「恋」の裏にある「寂」の情緒も、主観的情緒として「欲」の情緒と関連している。

こうした実存的な情緒のなかで最も重要なのは、「寂」である。それに、「寂」の情緒は個体の自我否定の地平において「哀れ」・「憐み」の情へと放散する一方、自我肯定の地平において「恋」の裏に集中しているという。その「博愛的放散」と「恋愛集中」とを共に備えるところに、個性の感情的反省としての「寂」の生命が存在している。

さらに、個的存在が現実の世界に与えられた偶然性に満ちた個的運命に対して「驚き」の情緒が起こり、その運命を静観した後に「驚き」の情を「不苦不楽受」という形而上的「無記」の情緒として受け止めるべきだとしている。つまり、九鬼は人間と実存の重要性を強調し、仏教や日本文化の特殊性と繋がる生の哲学の視野から感情に適応する方法を考えていたことが見られる。

以上のように、感情の適応性において、デカルトは精神が情念の本質を認識した上で、「高邁」の徳によって、「善き意志」を以て、情念の悪用とその過剰とを避けることを通して、情念の混乱を抑えることができると考えていることが分かった。それに対して、九鬼はデカルトの人間学と六つの基本情念から影響を受けながらも、その上でさらに、生の哲学の視点から情緒の重要性を人間と実存の概念に置き、その本質を形而上的境地にまで追究した。そして、個体としての人間が現実の世界で出会った運命を諦観による「不苦不楽受」という「無記」的情緒として受け止めるべきだと考えたのである。

23) 同書, 247-249 頁

24) 同書, 276-278 頁

25) 九鬼周造 (1981b) 『九鬼周造全集 4』 岩波書店, 217-219 頁

## V. おわりに

本論において、感情の定義・分類・適応性の三つの方面から、デカルトの情念論と比較することによって、九鬼の情緒論の哲学的特質を考察してみた。

まず、感情の定義において、九鬼はデカルトの人間学に影響を受けながらも、身体と精神の二元論ではなく、心身合一の人間論という道を選び、精神による感情の統制ではなく、「全人」的な観点から情緒を考えた。次に、感情の分類において、九鬼はデカルトから、「驚き」を根源的な情念とすること、時間性によって情念を分類する方法などを受け継ぎながらも、他者や世界との関係性や、情緒の気分属性による情動の内面的変動性などの多様な方法で情緒を分類している。最後に、感情の適応性において、九鬼はデカルトから人間の本性に基づいて情念を治めるべきことを学びながらも、生の哲学の視点に基づき、現実の世界に実存している人間の情緒を重視し、それらをアジア文化に根ざしている「不苦不楽受」という「無記」的情緒として受け止めるべきだと考えたのである。

### 参考文献

- 大西克礼 (2013) 『自然感情の美学 大西克礼美学コレクション2』書肆心水  
九鬼周造 (1981a) 「人間学とは何か」『九鬼周造全集 3』岩波書店  
九鬼周造 (1981a) 「驚きの情と偶然性」『九鬼周造全集 3』岩波書店  
九鬼周造 (1981b) 「情緒の系図」『九鬼周造全集 4』岩波書店  
九鬼周造 (1981b) 「芸術と生活の融合」『九鬼周造全集 4』岩波書店  
九鬼周造 (1981c) 「西洋近世哲学史稿・上」『九鬼周造全集 6』岩波書店  
九鬼周造 (1981d) 「西洋近世哲学史稿・下」『九鬼周造全集 7』岩波書店  
坂部恵解説 (2000) 『京都哲学選書 5 九鬼周造「偶然性の問題・文芸論」』燈影舎  
ジョセフ・ルドゥー (松本元・川村光毅ほか訳) (2003) 『エモーショナル・ブレイン 情動の脳科学』  
東京大学出版会  
谷川多佳子 (1995) 『デカルト研究—理性の境界と周縁—』岩波書店  
デカルト研究会編 (1996) 『現代デカルト論集Ⅲ 日本篇』勁草書房  
デカルト (花田圭介訳) (1993) 「情念論」『デカルト著作集3』白水社  
デカルト (谷川多佳子訳) (2008) 『情念論』岩波書店  
廣川洋一 (2000) 『古代感情論』岩波書店  
山田弘明 (2016) 『デカルトと西洋近世の哲学者たち』知泉書館  
渡邊正孝, 船橋新太郎編 (2015) 『情動と意思決定—感情と理性の統合—』朝倉書店